

茶馬古道沿いの木地製作

金丸良子

1. はじめに

本稿でいう木地製作とは、椀や盆などに代表される木地製品の製作のことである。この種の木地製作の特徴は、製作工程において、ロクロ¹⁾を使用することである。日本では、木地屋（木地師などとも称される）と呼ばれる工人が、この木地製作に従事してきた。木地屋は、滋賀県の山間部に位置する蛭谷および君ヶ畑（現東近江市）の隣接した両集落を根元地すなわち発祥地と称し、そこから全国各地の山中に分散して居住したとされている。このような伝承を有することや、あるいは最初に木地屋に注目した研究者が、日本民俗学の祖と称されている柳田國男であったことなどから、木地屋は次のようにみなされてきた。すなわち、ロクロを用いて椀をはじめとする各種の木地製品を製作する技術は、日本列島において独自に考案され、その後改良が加えられてきた²⁾。

しかしながら、近年海外においても、日本同様、ロクロを用いる木地製作が実施されていることが判明しだした³⁾。茶馬古道の中心である中華人民共和国においても、田畑久夫・金丸良子（田畑・金丸 1993）、田畑久夫（田畑 2006, 2010）などの論攷が発表され、日本以外にも木地屋同様の木地製作に従事する工人、および彼らを主たる構成メンバーとする集落が存在することが明らかになってきた。このような研究動向を受け、中国人研究者による木地製作に関する詳細な論文（張他 2005）も出はじめた。今後の更なる調査・研究が大いに期待される。

本稿の研究対象である茶馬古道は、中国西部に位置するチベット自治区、四川省および雲南省の3つの自治区と省との間をつなぐ古代より発達した交易ルートをいう⁴⁾。その名称は、四川省や雲南省で栽培・加工・製品化された製茶などの商品と、チベット特産のやや小型ながら馬力の強いチベット馬や薬草などの漢方薬材との交易に、馬を使用して互いの

商品を目的地にまで運搬したことに因んでいる（《茶馬古道》編集部編 2003：20-21）。現在では、雲南省内の茶馬古道を中心に、国内の観光客は言うに及ばず、日本人を含む外国人観光客も大幅に増加しており、中国西部最大の観光スポットになりつつある⁵⁾。

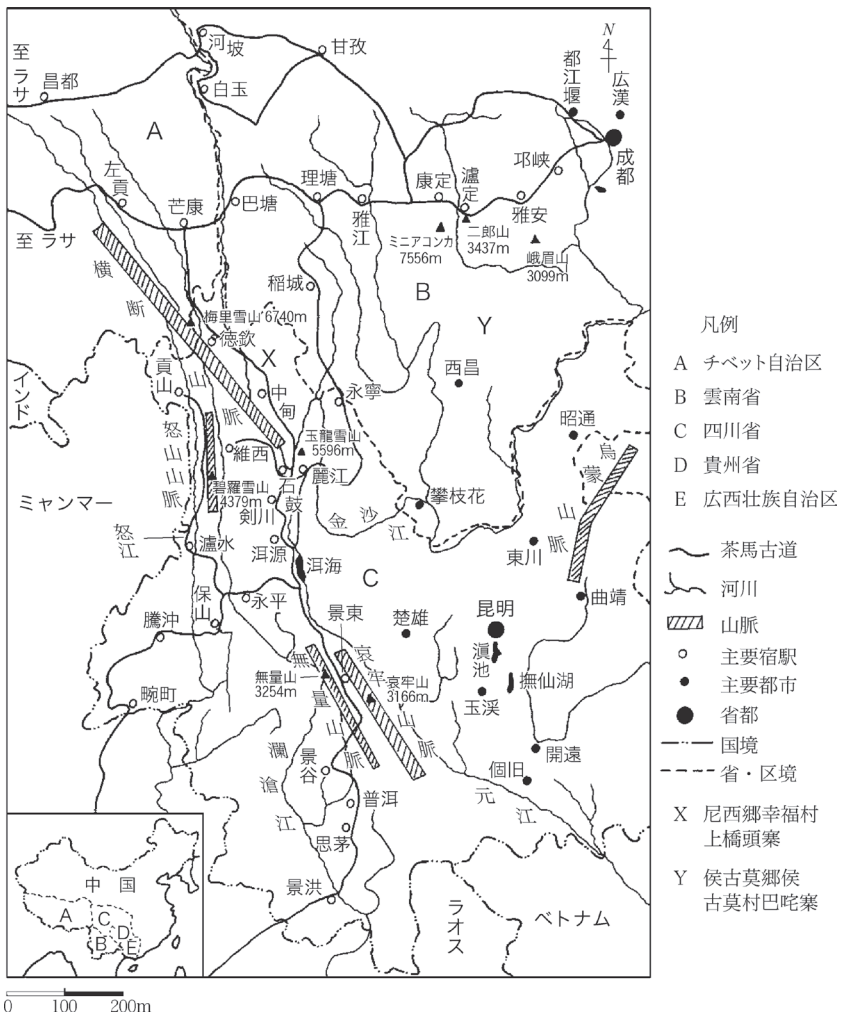
本稿では、以上述べた特色を有する茶馬古道沿いに分布・居住する少数民族⁶⁾に焦点を当てる。そして、その中でもとりわけロクロを用いて製作する木地製作を対象として論を展開していく。その理由としては、製作された木地製品は製作地周辺で開催される定期市など地元でも消費されるが、多くは茶馬古道を通じてチベット族やイ族などの居住地区で売買されている⁷⁾。すなわち、現在においても木地製品の流通に関しては、茶馬古道が大きな役割を担っているといえる。

2. 地域の概略

前項でも論じた如く、茶馬古道は雲南省や四川省で生産あるいは採集された製茶と、チベット自治区特産の薬草などの薬材との取引に、馬（馬自体も取引の対象）を使用して運搬や要所で開催される定期市での売買などに従事してきた。第1図は、雲南省および四川省を中心とする茶馬古道の主要街道を図示したものである。

第1図を参照すると、雲南省および四川省では茶馬古道の行程に関して著しい相違が認められる。すなわち、前者の雲南省内を通過する茶馬古道は、南部においては平行する無量山脈と哀牢山脈との間の河谷に沿って北上し、その後さらに長江上流金沙江（一部はサルウィン川上流怒江）沿いに遡上を続け、ラサに向かうというように、南北方向に連なる山脈や河谷を利用している。

一方これに対して、四川省内の茶馬古道の基点は省都成都と考えられる。成都からラサに向かうには、西方に進むことになるが、雲南省内でもみられたように当地域の山脈や河川は南北方向を示している。そのため茶馬古道は山脈や河川を横断せねばならず、アップダウンの激しい山道となる。このように、非常に往来が困難にもかかわらず、西方に向か



第1図 茶馬古道（部分）

[出所] 現地での聞き取りなどにより作成

う茶馬古道が重要視されたのは、成都が漢方薬の材料となる各種の薬材が集結する場所として中国国内でも有名だからである。そのため、茶馬古道を通して主としてラサ方面から、各種類の薬草などの薬材が運搬されてきた。この点は、雲南省内の茶馬古道の基点と推定される普洱が周辺で生産される普洱茶の集結地であることと共通している。とくに前項でも指摘したように、茶は、チベット族の食事にとって必須のものであるバター茶の材料として、ほぼ毎日使用されているからである。しかし、茶の材料となるチャの木（*Camellia Sinensis*）は海拔高度の関係から成育できない。それ故、茶はすべて近隣の省から買い込まれている⁸⁾。その最大の拠点が雲南省の普洱なのである。

以上から茶馬古道は、古道沿いに住む少数民族としては、外部世界の情報を得ることを含めて重要な生活ルートであるとともに、現金収入を得る場所でもあった⁹⁾。木地製品の製作も街道沿いの住民にとっては、貴重な現金収入源の1つであった。その他、茶馬古道沿いに住む少数民族

第1表 茶馬古道沿いの少数民族の副業

民族名	海拔高度 (m)	主要居住地域	生業形態	主な副業					
				木地 製作	竹木 細工・ 工	製 紙	土器 製作	薬草 採集	そ 他
チベット	1900-4000	チベット自治区・ 雲南省・四川省・ 青海省	牧畜・農業	○			○		皮革加工 銀細工
リス	2200-3300	雲南省	狩猟 ^① ・農業		○			○	毛皮販売
イ	1500-3000	四川省・雲南省	牧畜・農業	○	○				
ヌー	1500-2000	雲南省	狩猟 ^① ・農業					○	毛皮販売
ナシ	1500-1900	雲南省	農業		○	○			皮革加工
パー	900-1500	雲南省	農業	○	○			○	銀細工
ハニ	500-800	雲南省	農業					○	製茶 ^②

註) ①現在は禁止されている。②専業も多い

[出所] 現地での聞き取りなどにより作成

は、副業として陶器、製紙などの商品を周辺で製作し、茶馬古道を通して販売することで現金収入を得る者もいた¹⁰⁾。その概要を表にして整理したのが第1表である。

第1表を参照すると、茶馬古道沿いに居住する少数民族が、ラサなどの大消費地や古道沿いに設置された主要な宿駅などに運び販売することを目的として、それぞれの地域の特産物を製作や製造していたことが具体的に判明する。しかも、この第1表から各々の少数民族は、それぞれ異なった特産物を製作や製造していた。以上述べたように、少数民族ごとに副業として製作や製造される製品が異なるのは、少数民族が生活している主要空間が異なっているからである。すなわち、各々の少数民族は、茶馬古道沿いの限定された地域に居住しているのであるが、主として生活している空間の海拔高度が互いに異なっている。それ故、自然環境の相違に左右されやすい。これらの地域に居住する少数民族の生業形態に関しては、次のような特色が認められる。

具体的にいえば、生業形態において、リス族やヌー族ではジャコウジカ、クマなどの大型の野生動物の狩猟もみられたが、現在では野生動物保護法に基づいて、野生動物を狩猟することが全面的に禁止されている¹¹⁾。そのため、はだか麦の耐寒性品種であるチンクー麦、ジャガイモ、小麦、さらには低地では水稻を主として栽培する農業¹²⁾、およびヤク、毛が黄色を呈する黄牛、ヤギなどの放牧を中心とする牧畜業¹³⁾がほぼ共通している。しかし、各少数民族が副業として実施している特産物に関しては、とくに、それぞれの少数民族が居住する生活空間の海拔高度に適したものが、特産物として製作や製造されている¹⁴⁾。このように茶馬古道沿いに居住する少数民族に関しては主とする生活空間が異なるという、いわゆる住み分け現象がみられる¹⁵⁾。それ故、各々の少数民族の生活空間に適した特産物が副業となったものと推察できる。

3. 茶馬古道沿いの木地製作

既出の第1表からも判明するように、茶馬古道沿いに居住する少数民

族の中で木地製作を実施しているのは、チベット族、イ族、ナシ族の3つの民族集団である。茶馬古道沿いに居住する他の少数民族が木地製作に従事しないのは、製作工程においてロクロという特殊な工具を使用せねばならず、その操作には熟練が必要であることがあげられる。以下では、木地製作を実施している少数民族の中でも、現在において比較的多量に木地製品を製作している、チベット族およびイ族について、その製作工程などを中心に検討・分析していくことにする。

1) チベット族の木地製作

チベット族の最大の集結地域はチベット高原である。チベット高原は海拔高度が平均 4000 メートルを超える高所に位置している。それ故、気候条件は大変寒冷で、木地製作に使用するための巨木がほとんど生育しえない。つまり、原木が存在しないため、当地域では、木地製品を製作することはほとんど不可能である。にもかかわらず、前項においても指摘した如く、椀や盆に代表される木地製品は、住民の日常生活やチベット仏教寺院（ラマ寺）などにおいて、神器としての需要も多い。茶馬古道はこれらの用途に使用される木地製品を運搬する主要な街道というよりも、唯一の街道といえる。

このように、チベット高原に分布・居住するチベット族は、チベット高原周辺の他地域で製作された木地製品を購入し、それを使用している。その場合のチベット族周辺地域というのは、チベット高原南東部に位置する雲南省北部および西部の四川省西部が該当する。それ以外の地域は、北部にはコンロン（崑崙）山脈、北東部にはタングラ（唐古拉）山脈、南部には西からカラコルム山脈、ザンスカール山脈、ヒマラヤ山脈という、それぞれ夏季においても氷河や残雪がみられる非常に高峻な大山脈に取り囲まれており、チベット高原よりも自然条件が厳しいため除外されるからである。雲南省北部および四川省西部の両地域は、それぞれチベット族の最大の結集地であるチベット高原に隣接している。そのため、両地域には以前よりチベット族が分布・居住していた¹⁶⁾。というのは、チベット仏教最高の活仏とされるダライ・ラマ 14 世（ガワン＝ロサン＝テ

ンジン＝ギャンツォ Ngag dbang blo bzang ye shes bstan 'dzin blo mtsho) が、社会主義体制をとる中国に合併されることを嫌い、1959年3月にインドに亡命した(江上編1987:619-621)。そのような状況の中で、以前よりチベット族が居住していた雲南省北部や四川省西部にも親類縁者を頼るという理由などで、進出し定着しだしたのである。

こうして、雲南省北部および四川省西部に居住することになったチベット族の一部が、副業の1つとして木地製作に従事することとなった。多岐にわたる副業の中で特に木地製作が選ばれたのは、次の2点があげられよう。

すなわち第1点は、先住地であるチベット高原は、前述した如く、海拔高度が非常に高い、そのため一部の地域を除いて農業を経営することは困難で、広大な草原においてヤク、ヤギ、馬などの家畜を放牧あるいは遊牧する牧畜業が生業の中心であった。これに対して、海拔高度がやや低い、雲南省北部や四川省西部では、チベット高原同様牧畜もみられるが、チンクー麦、ソバなどの雑穀か、ジャガイモなどのイモ類を栽培する農業が主体となっている。そのため、冬季を中心とする農閑期に、周辺に生育する広葉樹の大木を用いて、木地業が実施されることになった。第2点としては、椀をはじめとする木地製品は、ウルシの木 (*Rhus verniciflua*) の樹皮から採取される漆をかけ、漆器として出荷されることが多かった。そうすることによって、見晴えも美しく、長期間にわたって使用に耐えることができるようになった。両地域は木地業が成立する条件に適していた。さらにそれに加えて、ラサという大消費地にも近いという流通上の優位性を兼ねそなえ、上述の如く商品運搬のための街道も整備されていた。

チベット族の木地製作の事例として、雲南省最北端に位置する迪慶藏族自治州香格里拉県尼西郷を取りあげる¹⁷⁾。尼西郷は、県城香格里拉鎮(中心鎮 旧中甸)から北西方向に約39キロメートルほど離れている(第1図 X)。郷の中心部を北西から南東にかけてほぼ一直線上にラサに通じる茶馬古道が走っている¹⁸⁾。郷の平均海拔高度は3160メートルである。1982年に人民公社が解体され、生産責任制が導入された¹⁹⁾。郷内は江東、

湯満、新陽、幸福の4村が設置され、4村はその下部組織として合計47の村民小組（寨、自然村に該当）を統括している。郷の戸数は1178戸、人口は6425人である。その内チベット族が最大の人口を擁し、総人口の約98パーセントを占めている。主要な産業は、チンクー麦、小麦、トウモロコシなどを主として栽培する農業（畑作）と、ヤク、黄牛、羊などの家畜を放牧する牧畜業である。すなわち、当郷はチベット族の居住地区としては典型的な生活を営んでいえるといえよう。

木地製作は、以上のような特徴を有する尼西郷全域で実施されているのではなく、上述した4村の内幸福村のみである²⁰⁾。幸福村は郷の中心から北西方向に約28キロメートル離れており、15の村民小組（寨）から構成される。木地製作は、その中でも上橋頭寨と行多寨の2集落のみで実施されてきた。本稿では上橋頭寨の木地製作を中心に論じていく²¹⁾。上橋頭寨は戸数36戸、人口162人である。その内木地製作に従事しているのは8戸である。以前にはもう少し多くの家が木地製作を実施していた。しかし後継者不足などの理由から廃業する家もあり減少した。古老の話を総合すると、中華人民共和国成立以前は12戸であったが、その大半は専業に近いかたちで木地製作に携わっていたという。

上橋頭寨での木地製作の事例として、馮・W家を取りあげ、検討していく。同家を取りあげたのは、当集落で白木地の椀などの木地製品に漆をかける作業を最初に開始したのが同家の祖先だからである。このように、上橋頭寨は、元来細々と農業と牧畜を経営してきたが、馮・W家の祖先に見習って白木地に漆をかけ、漆器として出荷する農家が増加しだした。周辺の山地に漆を採取するウルシの木が豊富に自生していたからであった。その後、馮・W家の祖先は周辺の木地製作者より購入していた白木地の製品を自らがロクロを用いて製作することになった。これにより、上橋頭寨では漆器としての製品が一貫して製作できることになった。馮・W家の高祖父の時代のことであった。

その後上橋頭寨の住民は、馮・W家の成功を眼の前にして、次々と木地製作を開始した。木地製作の具体的な事例として、兄弟および弟の長男がそれぞれ独立して家を構え、木地製作を実施し、現在では同寨の木

で結論は保留しておきたい。

謝・Rも兄と同様に父親から木地製作の工程や技術を学んだ。長男も同様に謝・Rからその技術などを学習した。このように、同家では親から子へと製作工程や技術などが伝えられた。謝・Rは、製品の材料とする原木として、周辺の山地に自生しているツツジ属 (*Rhododendron*) に所属する広葉樹を伐採して利用してきた。このように、上橋頭寨の木地業が現在まで継続してきたのは、周辺の山地に材料となる原木が自生していたからである。また、木地カンナ、ロクロなど木地製作に使用する道具はすべて自分で製作する。この技術も父親から伝授された。同様に、謝家で木地製作に従事している者はすべて使用する道具は自身で製作した。以前使用していたロクロは一人挽きロクロと称される足踏み式のロクロであった。しかし上橋頭寨では、1980年代初めから電気モーターを動力とする、電気ロクロが普及しだした。現在では、上橋頭寨では木地製作に電気ロクロが使用されている。電気ロクロを使用すれば大量に製品を製作することができるうえに、作業での体力の消耗も非常に少ない。

謝・Rの場合、木地製作から得られる収入は、年度により多少差があるが、長男の木地製作代も合わせて年間4~5万円の収入がある。このような高収入が得られるようになったのは、1983年頃からチベット族の仲介人が当家に出入りするようになり、その仲介人による依頼注文で製作したことによる。仲介人に売りわたす価格は、個人が食器として用いる一般的な椀が1個当り20元、チベット寺院の神器として使用されるそれよりも大型の大椀は1個40~50元である。

このように、当家の木地椀が高価に販売できるのは、謝・Rが漆をかける技術を習得しており、白木地のままでなく漆器として販売できるからである。現在では、仲介人が年に3回ぐらい当家を訪れ、前回に依頼しておいた椀を受け取り、次回に必要な椀の製作数が取り決められる。仲介人は当家以外にも上橋頭寨で製作された椀を謝・R家と同様の方法で買い集め、茶馬古道（現在では滇蔵公路）を利用して、ラサなどのチベット族に販売している。なお近年では、ツツジなどの原木が不足ぎみとなっている。というのは、電気モーターを動力とするロクロ（電気ロ

クロ)の普及以来、椀などの木地製品を大量に製作することが可能になったためである²²⁾。それ故、原木は近くの材木工場などから購入している。自家の木地製作の特徴は、高収入が期待できるため、依頼があれば農閑期以外でも椀などの木地製品を納入することが可能であることである。

なお、謝・R家では、木地製作の他に農業も行っている。耕地を1.5畝(1畝は6.67アール)所有しているからである。この耕地は生産責任制が実施されたときに分配されたものである。トウモロコシ、小麦などを主として栽培している。そのため食糧はほぼ自給できる。その他、野菜を栽培する菜園(0.5畝)も所有している。家畜としては、黄牛6頭、馬1頭などを飼育している。それ故、謝・R家は農家としては上橋頭寨では平均的な家であるといえる。しかし、木地製品の収入が年間を通して安定しているため、比較的豊かな家といえる。

以上謝・R家にみられたように、チベット族の木地製作の特色は、電気ロクロを使用することで大量に製品を製作することが可能となったことがまず第1にあげられる。さらに、仲介人が椀などの木地製品を定期的に注文するため、安定した収入が期待できることもあげられる。しかし、チベット族の木地製作は上橋頭寨のようにすべて高収入を得ているとは限らない。

2) イ族の木地製作

イ族の最大の集中地域は、四川省南部に位置する大凉山と称される高峻な山岳地域である。ここには、男性が黒色のチャガルと呼ばれるマントを常にはおっていることから、イ族の中でも黒イ集団が主として居住している²³⁾。黒イ集団は黒い人と自称している(村松1973:166)。木地製作に従事するのはイ族の中でもこの黒イ集団のみである。その理由は、この集団が居住している大凉山地域と大いに関係している。すなわち、大凉山地域は平均海拔高度が2000メートルにも達する高地であるが、木地製作の材料として最適であるツツジ属の大木をはじめ、多種類の広葉樹が自生しているからである。さらに、製作された白木地は付加価値を付けるため漆をかけ、漆器として出荷される。大凉山地域には樹皮から

漆を採取するウルシの木が多く自生していることも、当地域で木地製作が行われている理由とみなされる。この点は、前項で紹介したチベット族の木地製作地とはほぼ同一の自然環境であるといえる。さらに加えてチベット族の木地製作と共通しているのは、木地製作を行う工人、日本でいう木地屋が漆をかける工程を一人で作業するという点である。以下では、上述したような特色を有するイ族の木地製作の事例として、四川省凉山彝族自治州美姑県侯古莫郷の木地製作をとりあげ論じていくことにする（第1図 Y）²⁴⁾。

侯古莫郷は戸数1625戸、人口7380人で、13の村より構成されている。調査対象地域の侯古莫郷へは、美姑県の県城美姑（巴並鎮）から、美姑河の支流連渣洛河を遡上する。郷までの路面は以前では多くの箇所ではアスファルトがはがれており、大きな穴となっていた。その穴に雨季になると雨がたまり、不通となることが多かった。近年道路改修がすすみ、年間を通して不通になることがなくなった。県城から侯古莫郷の人民政府所在地侯播乃梅まで34キロメートル、車では2時間近くかかる²⁵⁾。

侯古莫郷の中心地の平均海拔高度は1640メートルであり、イ族の生活空間としては低所である。郷に所属する各村は、郷の中央を南北に流れる連渣洛河の河谷に散在して分布している。主要な産業は、上述したように比較的low所に位置しているため、農業が主体となっている。耕地では、トウモロコシ、小麦、ソバおよびダイズなどの豆類が栽培されている。また河谷の水利の便などの条件が良い耕地では、量が少ないが水稲が栽培されている。その他、馬、黄牛、水牛、豚、羊などの家畜も飼育している。しかし、それぞれの家畜の頭数は多くない。飼育された家畜は成獣となると売却される。この家畜の売却による収入が各家の貴重な現金収入源である²⁶⁾。同郷では、2001年より県や郷の人民政府の指導により、州都西昌市や省都成都市などに季節出稼ぎが開始された。その後、中国の近代化が急速に進展する中で、季節出稼ぎは上述の行政指導の他、個人でも出かけるようになった。その結果、郷内でも年間1000人ぐらいの人びとが出かけているとされる²⁷⁾。このような事情から木地製作は近年急速に減少している。

侯古莫郷の木地製作については、2つの異なるタイプがみられる。その第1のタイプは木地製作を専業としているものである。以前では、このタイプの木地製作者が大半を占めていたとされる。しかし現在では、郷内では侯古莫村侯古莫寨に居住する2人（戸）のみである²⁸⁾。このタイプの木地製作者は需要の減少、原木の不足などの理由により大幅に減少した。その第2のタイプでは、農作業の副業として、農閑期などを主体に木地製作を実施している。侯古莫郷侯古莫村巴咤寨に住む尼者・Wは、副業としてこのタイプの木地製作を実施している²⁹⁾。以下では、尼者・Wの木地製作を事例として、イ族の木地製作を具体的に検討していくことにする。

尼者・Wは現在40歳である³⁰⁾。父親（尼者・S、70歳）も幼少の頃から木地製作に従事していた。しかし高齢なため、人力でロクロ軸を回転させる一人挽きロクロを使用することができなくなった。そこで、椀などの木地製作は断念し、粥や汁物などを掬い取る杓子を注文が入れば製作している。杓子は、ロクロを用いずチョンナと呼ばれている道具のみで製作が可能である。それ故、椀などの木地製作よりも力を入れなくても製作できるからである³¹⁾。尼者・Wは18歳のとき、父親に弟子入りし、木地製作の技術を習った。木地製作に使用するのは、前述したように、チベット族に普及している電気モーターを動力とする電気ロクロではなく、父親も使用していた足踏み式の一人挽きロクロである（写真参照）。一人挽きロクロは自家製で、ロクロの回転軸の一部を除き木製である。尼者・Wも父親に教わり、1人で製作した。同型の一人挽きロクロは、尼者・Wが居住している巴咤寨では、木地製作を副業としておれば、製作可能であるという。また同寨では、一人挽きロクロがかつて木地製作を実施していた農家の軒先などに置かれており、多くの農家が副業として木地製作に従事していたことがうかがわれる。

尼者・Wは、郷内および周辺の住民から注文が入れば製作することが多い³²⁾。現在では主として周辺住民からの注文が多いビールなどを入れる酒杯を中心に木地製品を製作している。製作する場所は巴咤寨の他家と同様に、自宅に隣接した作業場に一人挽きロクロを設置し、製作して



写真1 四川省美姑県侯古莫郷のイ族の木地製作

いる。なお巴咤寨には電気が通じているが、電気ロクロは普及していない。その理由は電気ロクロを使用するほどの原木や漆を採取するウルシの木がないからである。

尼者・Wの現在もっとも多く製作している酒杯の場合は次のように行なわれている。酒杯以外の椀などの製作も基本的には同様に行う。これら木地製品の製作はすべて尼者・W 1人で作業する。使用する木材すな

わち原木は、以前ではチベット族の木地製品と同様に、ツツジの木が最適とされた。しかし、周辺の山地には製作に適したツツジの大木が非常に少ない。そこで最近では、周辺で植林されているシナアブラギリ (*Aleurites fordii Hemsl ex Steud*) を製材所などで購入し、使用することが多い。シナアブラギリの種子から桐油が採油できる。桐油はペイント、ワニスなどの工業用油として需要が多い。県などでは、有力な換金作物として、シナアブラギリの植林を奨励している。それ故、作業は、製材所でシナアブラギリの購入からはじまる。シナアブラギリの生木は軟かいため製作しやすい。しかし水分を含んでいるので乾燥するとひびが入ったり、変形が生じやすい。そのため、製材所で長期間貯蔵されていた古木を利用している。酒杯の製作の様子を示したのが第2表である。以下では、この第2表を参照して検討していくことにする。

酒杯の製作工程は大きく4つの工程に分かれている。第Iの工程は製品の外形をおおまかに成型する作業が中心となる。成型された外形は荒型と称される。その第1の作業は、製材所で購入したシナアブラギリを酒杯の大きさ(約20センチメートル)に輪切りする(A-1)。その際寸法は計測するのではなく勘に頼る。木地製作の職人としての腕のみせどころである。使用する道具は鋸のみである。輪切りが終わると、手斧や鉋

第2表 酒杯の製作工程

名称・製作工程		内 容	使用道具
Ⅰ. 荒型取り	A-1	原木を輪切にする	鋸
	A-2	長方形の荒型を製作する	手斧・鉋
	A-3	荒型の外形を整える	鉋
	A-4	ロクロ回転軸に入るように荒型を整える	鉋
Ⅱ. ロクロ掛け	B-1	荒型をロクロ回転軸にはめ込む	木槌
	B-2	ロクロを回転させ、内側を削り抜く	ロクロ・木地カンナ
	B-3	ロクロを回転させ、外側を整える	ロクロ・木地カンナ
Ⅲ. 仕上げ	C-1	紙やすりで内側・外側をみがく	紙やすり・ロクロ
Ⅳ. 漆塗り	D-1	白木地に漆を塗る	ハケ

[出所] 現地での聞き取りより作成

などを用いて外側を荒く酒杯の形になるように削る（A-2）。後でロクロを掛けやすいようにするためである。この作業が終了すると、荒型の底の部分をロクロ軸の内部に挿入しやすいように周辺部を鉋で削る（A-3）。

以上の作業が終われば、次の工程（第Ⅱ工程）であるロクロ掛けにすすむ。この工程が木地製作の中心であり、もっとも熟練した技が要求される。最初の作業は、荒型をロクロ軸の一方の先端に装填する（B-1）。装填には槌を用いてしっかりと固定できるように調節する。装填が終われば、両足でロクロ台の下にある足踏み棒を、足踏みミシンの要領で踏む。足踏み棒の先端にはロクロ軸に通じるロープが取り付けられている。交互に足踏み棒を踏むことでロクロ軸が左右交互に回転する。このロクロ軸の回転の遠心力を利用して、木地カンナの先端の鉄製の刃の部分に装填されている荒型に当て、内側を削り抜く（B-2）。さらにその後、成型した荒型の外側をロクロを使って整える（B-3）。これらの作業に用いる木地カンナは、木地製作専用のカンナで、木製の細長い柄の先端に鉄製の湾曲した刃が付けられている。B-2 および B-3 の作業では、先端の刃の部分の角度が異なっている木地カンナが用いられる。B-3 の作業で使用される木地カンナの方が、先端の角度が鋭角に曲っている。この用具も尼者・W自身がつくった。

次の第Ⅲ工程は仕上げである。紙やすりで荒型の内外をきれいに磨き、製品として完成させる（C-1）。とりわけ酒杯は直接口につけるものなので、感触をよくするためにも丁寧に磨く。この作業によって、一応木地製品は完成する。この製品が白木地と称される。日本では、この工程で木地製作者すなわち木地屋の作業が終了する。

次に最後の工程（第Ⅳ工程）である漆塗りが行なわれる。この作業では、ウルシの木から採取した漆に、より乾燥性の高い桐油を混ぜた漆液が用意される（D-1）。漆に桐油を混入するのは乾燥性を高めるとともに、塗りやすくするためである。漆はそのまま放置すると黒色を呈する。そこで、赤や黄などの色を出すために、漆液の中に天然の鉱石顔料を入れる。鉱石顔料の元になる岩石は、周辺の山中で自ら採取する³³⁾。このような工程で完成したものが漆器となる。

4. おわりに

近年になってはじめて中国西部地域の山岳地帯において、ロクロを使用する木地製作が実施されていることが具体的に知られるようになった。中国は世界でも稀な経済発展を遂げた。にもかかわらず、これらの地域は、伝統的な木地製作が日常的に実施されている数少ない地域である。椀に代表される木地製品は、日本では明治時代以降陶磁器製の碗にとって代わられた。安価で長期間の使用が可能だからである。

一方中国において、とくに漢民族居住地域では、古くから木製の椀よりも陶磁器製の碗の需要が大きかった。他方、チベット族居住地域では、本文でも言及した如く、伝統的な椀が継続して使用され、またチベット仏教の神器としての利用も多い。このような理由から、チベット族居住地域では木地製品の需要が存在した。しかし、チベット族が集合しているチベット自治区は海拔高度が非常に高い。そのため、木地製品の材料となる広葉樹の大木がほとんどみられない。それ故、周辺地域から椀などの木地製品を購入する必要性が生じた。その供給源となったのが、雲南省北部や四川省西部に分布・居住しているチベット族やイ族が製作する木地製品であった。その主要な運搬ルートとなったのが茶馬古道であった。雲南省北部のチベット族が製作する木地製品の多くは、この茶馬古道を利用して大消費地ラサに運ばれた。その典型的な事例が、謝・R家に代表される香格里拉県尼西郷幸福村上橋頭寨の木地製作であった。またイ族の場合は、チベット族ほど多くの木地製品をラサなどに運んでいないが、一部はチベット族の手にわたり利用され続けてきた。その代表的な事例が、尼者・Wに代表される美姑県侯古莫郷侯古莫村巴咤寨での木地製作である。

しかしながら、チベット族とイ族の場合、前者が製作する木地製品の多くが大消費地ラサに運ばれ、その地で流通したのに対して、後者のイ族の木地製品は周辺地域での需要が多く、木地製品のごく一部しかラサに運ばれなかった。その理由は、茶馬古道に直接沿っていないために、ラサへの流通ルートにのせることができなかつたからであると推察され

る。すなわち、雲南省北部に住むチベット族の場合、茶馬古道沿いに居住することで、製品を多くの需要が期待されるラサを中心とするチベット自治区へ直接運搬することが容易に可能となった。これに対して、四川省西部に住むイ族の場合、茶馬古道より離れた地域で木地製作を実施しているため、茶馬古道という運搬ルートに乏しく、周辺での需要が中心となったと推察できる。

以上のような相違は、一方では効率の高い電気ロクロの利用、他方では一人挽きロクロの使用という作業形態の差となっていると思われる。

なお近年、中国においても合成樹脂（プラスチック）の碗や、公司（会社）形式の大規模工場による電気ロクロ使用の碗などの木地製品が普及しだしている。しかし、チベット族居住地域では、前者の碗は熱湯を入れると熱くて持ちにくい、後者の公司形式で大量生産された碗などの木地製品は熟練工が製作に携わっていないこともあり、感触がよくないなどの理由からほとんど普及していない。しかし将来的には、チベット族やイ族が製作する碗に代表される木地製品は、合成樹脂でできた碗や大量生産された碗にとって代わられるかも知れない。

〔付記〕

本稿は、2010年6月12～13日に開催された日本文化人類学会第44回研究大会（於立教大学）において、「茶馬古道の木地製作」（共同発表）という題目で研究発表した内容の一部を骨子とし、その後の知見を加えた。なお同研究発表の要旨は、『日本文化人類学会第44回研究大会 プログラム・研究発表要旨』15頁に収録されている。

註

- 1) ロクロは粘土や陶土を材料とする碗に代表される陶磁器を製作する陶磁器用轆轤（縦軸轆轤とも称される）とは異なり、木地製作に用いられる轆轤である。この轆轤は回転軸が台に対して平行に取り付けられている、横軸轆轤である。それ故、両轆轤は構造が異なっている。本稿では、陶磁器用轆轤と区別するため、以下では木地製作用の轆轤をロクロと呼ぶことにする。

- 2) 日本の木地屋の根元地（発祥地）とされる蛭谷および君ヶ畑では、第55代文徳天皇（在位850-858年）第1皇子惟喬親王よりロクロを用いる木地製作の技術を伝授されたという伝承を有することなどから、木地屋の開祖を惟喬親王としている。
- 3) その中には、例えば、ネパール王国中部地方での木地製作に関する詳細は中川重年の報告（中川1983）などにみられる如く、使用されている工具はロクロではなく、木工材料学でいう旋盤（木工普通旋盤）と称されるもので、ロクロ（木工正面旋盤）とは明確に異なっている。それ故、中川重年の報告は、厳密には本稿が研究対象としている木地屋による木地製作とはいえない。旋盤とロクロとの相違は、次のとおりである。すなわち前者の旋盤は、加工材の一部を回転軸（主軸 マンドル）端に固着し、他端を心押軸で支えるという構造となっている。これに対して後者のロクロは、心押軸がなく、片端のみを回転軸に固着する（成田1990：169-200）。なお成田寿一郎によれば、橋本鉄男を筆頭に、従来の木地屋研究者は、旋盤とロクロの区別をしていないと指摘する（成田1990：180）。
- 4) 茶馬古道は唐代（705-907年）にその原形が生じ、明・清時代（1368-1644年）に急速に発達した。全盛期には、雲南省からチベット、北京、ビルマ（現ミャンマー）、ラオス、ベトナムに向けた合計5本の古道があった。
- 5) しかし茶馬古道沿いの観光スポットに関しても、国内からの観光客は勿論のこと、外国人観光客で大変なにぎわいをみせた大理、麗江（ジャン・サダム）などの従来からの観光スポットは、近年俗化現象が著しいなどの理由から、より北方に位置するチベット自治区との境界に近い、著名なチベット寺院松贊林寺（ソンツェリン・ゴンパ）が郊外にある香格里拉（旧中甸、ギェルタン）に移りつつある。なお同寺は、チベット仏教ゲルグ派（儀式においてかぶる帽子が黄色なので黄帽派とも呼ばれる）に所属している。1679年にダライ・ラマ5世（ガワン・ロサン・ギャツォ 1617-1682年）が創建した。僧侶が約700人おり、雲南省最大のチベット教寺院である。別名帰化寺とも称されている。
- 6) 日本と、市場経済開放にみられる近代化政策を取りつつも、社会主義国家体制を堅持している中国とでは、少数民族の捉え方が多少異なっている。というのは、日本では、例えば、アイヌのように、たんに人口が少ない民族集団であるという理由で少数民族と称している。しかし一方中国では、ベトナム社会主義共和国など他の社会主義国家体制を採用している国家同様、該当する民族集団が政府に申請し、その申請に基づき政府が認知すれば、少数民族と認定されるというように、少数民族の認定には政府つまり国家が直接関与

するという特色がみられる。そのため、貴州省に居住する西族のように、申請しても少数民族として認定されない民族集団も存在する（鈴木・金丸 1985：231-238）。中国に居住する 55 という少数民族は、すべて政府が認定した少数民族である。

- 7) チベット族が木地製品をとくに必要とするのは、次のような理由からである。すなわち、チベット族の主食はツァンパ（麦こがし）とバター茶である。そのツァンパの食器として、ロクロを用いて製作する木地製品の代表である碗を必要とするからである。現在他地域では、日本同様、陶磁器あるいは合成樹脂（プラスチックなど）製の碗が主流となっている。しかしながら、チベット族に関しては、各自食器を上衣の中に入れて絶えず持参することが習慣となっている。それ故、陶磁器の碗は重い上に壊れやすい。また後者の合成樹脂製の碗は、ツァンパを入れるとき熱湯を加えるため、熱くて持ちづらい。さらにチベット仏教の僧院では、果物などの供物を盛る盆、あるいは燭台などに木地製品が用いられる。以上の理由から、チベット族では木地製品の需要が高い。なお、チベット族居住地区周辺に居住するイ族の一部も、チベット族の影響を受けて、碗を食器として使用している。
- 8) 各種の製茶の中でも普洱茶が茶馬古道の運搬物資として重要視されるのは、茶葉を煉瓦状に圧縮乾燥させているので崩れにくく、運搬に便利な点があげられる。その中でも普洱茶は、貯蔵過程において、麴黴を繁殖させるため黒褐色または茶褐色となるが、古い茶葉ほど発酵度が高くなる。そのため、主要消費地のラサは遠距離に位置しているので、とくに普洱茶が好まれているようだ。
- 9) 中国の全人口（約 13.2 億人 2002 年統計）の約 92 パーセントは漢民族である。しかしながら、茶馬古道沿いには漢民族が多数居住していない。理由は、茶馬古道は主としてラサを目ざす街道であったので、辺境地帯しかも険しい山岳地帯を通過することが多かった。そのため、海拔高度の低い平坦地を主要な生活空間としている漢民族にとっては、住みづらい環境であるといえる。とはいうものの、漢民族の一部は、茶馬古道沿いの要所に定着し、商業に従事している。
- 10) このように、木地製品以外の商品は、農家の副業として製作された。商品が副業での製品の中心となったのは、茶馬古道沿いでは多量の消費が見込まれなかったからだと推察できる。それに対して、碗・盆をはじめとする木地製品は日常に使用されるので安定した需要が存在する。そのため、副業というよりも専業者によって構成される集落もみられた。現在では、食事の変化などもあり需要が少ないので、他の商品同様農閑期での副業となっている場合

が多い。

- 11) 以前は香料などとして用いられる麝香を取るためにジャコウジカ、胆嚢が高級薬材となるクマなどが狩猟対象とされた。現在では、法律によりこれらの野生動物の捕獲が禁止されている。しかしリス族の場合、自家消費用に限定したものであれば地区により黙認されているようである。
- 12) リス族やヌー族の一部では、焼畑農業が伝統的な生業であった。しかし現在では、野生保護法同様、森林破壊の防止という目的から禁止されている。リス族の場合、自家消費のためにごく小規模の造成であれば黙認される場合もある。
- 13) チベット族の一部では、夏季に山頂付近の牧草地で放牧し、冬季には山麓に戻るといふ移牧（トランスヒューマンス）形式の遊牧もみられる。なお、新疆ウイグル自治区北部の遊牧地帯（カザフ族、モンゴル族が居住）では、草原を遊牧するのは森林が生育しにくいなど環境に悪影響を与えるという理由で、遊牧民（60歳以上）に対して月額65元（1元は約13円）程度の補助金を与え、草原での遊牧を禁止したり制限するという政策が実施されている。しかし当地域では、まだこのような政策は実施されていないようである。
- 14) 第1表からも判明するように、少数民族が製作や製造するのではなく、薬草採集のように、山中に自生しているものを採集する場合もみられる。なお薬草採集が典型といえるが、少数民族が自らの生活空間を越えて採集することもある。そのため、それぞれの少数民族の生活空間は厳格に守られているとはいえない。
- 15) この点に関連するが、筆者は、本稿の対象地域である茶馬古道の少数民族の生活空間に関する住み分けモデルを検討したことがあった（金丸2008）。雲南省北部に関しては、海拔高度の高所から低所にかけて、一部は重複する場合もみられるが、チベット族、リス族、イ族、プミ族、ナシ族、ペー族という順で住み分け現象がみられる。
- 16) 雲南省北部及び四川省西部にチベット族が居住しだしたのは、茶馬古道と関連があると推察できる。すなわち、チベット仏教の最大聖地ラサに茶馬古道が開通するようになると、その古道を利用して種々の商品の運搬業に従事するチベット族もみられるようになった。そして、その一部は、茶馬古道沿いに居住することになった。上記の雲南省北部および四川省西部の両地域は、とくにチベット高原に隣接している。そのため、チベット族が移動して定着しやすかったと思われる。
- 17) チベット族は、本文でも論じたように、雲南省北部および四川省西部においても居住しており、各地で木地製作を実施している。にもかかわらず、本稿

では対象を香格里拉県尼西郷のみに限定したのは、次のような事情が存在するからである。両地域を含む西南中国の少数民族居住地区に関しては、従来より観光目的は勿論のこと、研究目的であっても外国人が自由に訪問することが厳禁されている対外「未開放」地区に指定されていた。しかし近年、チベット自治区を除くすべての省や自治区において、この指定が解除され、法的には自由に訪れることが可能となった。しかしながら、種々の事情から、研究とはいえども外国人研究者が少数民族居住地区内で調査することは非常に困難であった。その中でもチベット族に関しては、独立問題をはじめ著しく政治問題化しており、中国政府がとくに神経を尖らせている地域である。そのような関係からチベット族の現地調査については種々制約が設けられており、調査の許可が下りることが非常に少ない。そのため、調査を実施することができたのが尼西郷のみである。今後現地調査を増やし、その信憑性を高めたいと念じている。なお、イ族に関しても、チベット族同様現地調査は大変困難をきわめ、従来外国人研究者による現地調査は実施されてこなかった。

- 18) 現在では雲南省の省都昆明とラサとを結ぶ幹線道路滇蔵公路となっている。この滇蔵公路は、尼西郷内のように茶馬古道を踏襲している。
- 19) 以下尼西郷に関する統計資料は2004年末のものである。これらの統計資料は同郷人民政府での聞き取りによる。周知の如く、中国の行政機関（人民政府）が設置されているのは郷までである。その下位組織である村には行政機関が置かれていない。なお、同郷の調査は、雲南民族博物館の協力の下に2004年8月に実施した。同行は昭和女子大学田畑久夫教授である。
- 20) 尼西郷の副業としては、木地製作の他に土器製作がみられる。土器製作は郷全域で実施されているのではなく、木地製作のように湯満村堆寨という集落に特化している。同集落では集落のほとんどが土器製作に従事し、副業よりも専業としている家が多い。
- 21) 行多寨に関しては、2001年に雲南大学「雲南民族村寨調査」の一環として調査が実施された。その「雲南民族村寨調査」は、雲南省に居住する主要な少数民族25の選定された各集落をインテンシヴに調査するというものである。行多村については、既に報告書が出版されている（雲南大学組織編写・主編高2001）。なお同報告書では、集落名が理由不明であるが、行多寨ではなく、形朶寨とされている。現地の聞き取りで、形朶寨が行多寨であることは確証を得ている。
- 22) 中華人民共和国成立以後、上橋頭寨などの木地製作者が12戸集合して、1955年に中甸県（現香格里拉県）木器生産合作社が創設された。同社は、その後

- 尼西木器生産合作社，中甸民族木器社などその名称を変更した。現在では，中甸民族木器社は县城の香格里拉にあるが，国家からの援助が期待できなくなったため，ほとんど操業されていない。全盛期の1980年代では，20数人の木地製作者がおり，年間椀や鉢などを製作して6万～7万円の収入があった（雲南省中甸県地方志編纂委員会編1997：601-662）。なお，謝・Rも一時同社に参加して木地製作に従事していた。
- 23) 黒イ集団は男・女ともターバンを巻いている。この点も黒イ集団の特徴とされる。なおイ族は，黒イ集団の他に，雲南省南部を中心に，ア・シと自称する白イ集団がいる。
 - 24) 調査は2008年9月に実施した。同行は昭和女子大学田畑久夫教授である。本調査には，凉山彝族自治州民族研究所をはじめ，地元の研究機関の協力を得た。また同研究所副研究員巴旦日火先生にも同行していただき，直接種々の教示を受けた。
 - 25) 以下の侯古莫郷の現況に関しては，侯古莫郷人民政府での聞き取りによる。
 - 26) その他侯古莫郷で特記すべきことは，2005年に非常に大規模な集中豪雨に見舞われた。そのとき山津波も発生し，家屋の崩壊や耕地の流出など多大の被害を受けた。2008年当時でも，これらの被害は完全に回復していない。
 - 27) 侯古莫郷では2002年に農業税が廃止された。それに伴って自由に都市などに季節出稼ぎに行くことが可能となった。しかし，住民の多くは中国語を充分に話すことができないので，行先や職種には大きな制限があるという。
 - 28) その内の1名については，西南民族大学博物館の研究者である張建世教授による詳細な報告が既に存在する（張他2005：22-58）。
 - 29) 巴咤寨は戸数100戸余りで構成されるが，尼者・W家以外にも数件副業として木地製作に従事している。同寨でもチベット族の木地製作同様，男性が1人で実施する。主要な製品は，以前では椀が中心であったが，現在では酒杯などが多くなっている。
 - 30) 本文での年齢は調査時（2008年）のときの年齢である。以下本文の記述は尼者・Wおよび父親（尼者・S）による聞き取りをまとめた。
 - 31) とはいうものの，実際に杓子を製作するにも相当力が必要で，経験がなければ削ることが困難である。なお日本では，杓子を専門に製作する工人は杓子屋と称され，ロクロを使用する木地屋とは明確に区別する見解（橋本1969：4）と，杓子屋を広い意味で木地屋に入れる意見（杉本1967：3）が対立して存在する。
 - 32) 製作された木地製品は，近くの牛牛壩の定期市でも販売されている。尼者・Wが直接定期市に持参するのではなく，巴咤寨にやって来る仲介人に売却し

たものが定期市で販売されているようである。牛牛壩は、皇城美姑と侯古莫郷のほぼ中間に位置し、美姑河と支流連渣洛河の合流地点にある。定期市の開催には、周辺の住民が1万人近く集まる県内最大の定期市である。筆者が参観した日は天候に恵まれなかったこともあり、木地製品を販売しているのは1軒のみであった。販売していたのは蓋付きの漆器の大・小椀であった。なお、これら定期市で販売されている木地製品の一部は成都に運ばれる。成都にはチベット族専門の商店が並んでいる一角がある。そこでは、チベット族やチベット仏教寺院に必要なほとんどの品物が販売されている。木地製品を専門に扱う商店も数軒みられる。これらの商店は、間屋的な性格を兼ねもち、ラサなどから茶馬古道（現在はラサと成都を結ぶ幹線道路・川蔵公路となっている）を利用して購入に来るチベット族も多い。また、この道路を通じてラサへも多くの商品が運ばれている。それ故、チベット族の製作した木地製品と同様、尼者・Wなど巴咤寨で製作された木地製品も茶馬古道で運ばれ、ラサでも使用されている。

- 33) ウルシの採取期間は毎年9月から10月の2ヶ月間に限定される。この期間のウルシの樹液がとくに高品種だからである。ウルシの木は巴咤寨の集落よりもかなり高度の海拔2000~2500メートルの山中に自生している。採取可能な木は樹齢10年ぐらいの木である。樹液は1ヶ月に3回、合計6回採取する。すると葉が枯れ、本体も枯れてしまう。年間1本のウルシの木から1.5斤（1斤は500グラム）の樹液が採取できる。尼者・Wは2007年に酒杯を2000個製作した。原木のウルシの木は大木5本必要であった。その結果5000元余りの収入を得た。

参考文献

- 江上波夫編（1986）『中央アジア史（世界各国史16）』山川出版社
鈴木正崇・金丸良子（1985）『西南中国の少数民族 貴州省苗族民俗誌』古今書院
杉本壽（1967）『木地師制度研究序説』ミネルヴァ書房
田畑久夫（2002）『木地屋集落——系譜と変遷——』古今書院
田畑久夫（2006）「チベット族の木地製作——雲南省香格里拉県を事例として——」『昭和女子大学文化史研究』10 5-34頁
田畑久夫（2010）「イ族の木地製作——四川省凉山彝族自治州美姑県侯古莫郷を事例として——」『昭和女子大学文化史研究』13 1-26頁
田畑久夫・金丸良子（1993）「中国雲貴高原の木地屋集落 前編、後編」『地理』38-2 106-112頁, 38-5 106-116頁

- 張建世・楊正文・楊嘉銘（2005）『西南少数民族民間工芸文化資源保護研究』四川民族出版社 22-68 頁
- 《茶馬古道》編輯部編（2003）『茶馬古道』陝西省師範大学出版社
- 中川重年（1983）「ネパール中部における伝統的木工旋盤について」『森林文化研究』4-1 155-163 頁
- 成田寿一郎（1990）『日本木工技術史の研究』法政大学出版会
- 橋本鉄男（1969）「滋賀県の木地師の習俗」文化剤保護委員会編『木地師の習俗 1』平凡社 1-288 頁所収
- 橋本鉄男（1979）『ろくろ』法政大学出版会（ものと人間の文化史）
- 村松一弥（1973）『中国の少数民族——その歴史と文化および現況』毎日新聞社
- 雲南省中甸県地方志編纂委員会編（1997）『中甸県志』雲南民族出版社
- 雲南大学組織編写・主編高發元（2001）『雲南民族村寨調査藏族——中甸西郷形朶村』雲南大学出版社